1. 単元 「日本の川と平野」～築城と地形の関わりから～

2. 単元目標

- (1) 戦国期の城の立地について考察する活動を通して、地形の特徴を生かしたり克服したりして自然に適応してきた人々の営みに対して関心を持つ。
(社会的な事象に対する関心・意欲・態度)
- (2) 戦国期の城が現在の場所に位置している理由を、軍事的・政治的・経済的側面や地形の特徴を踏まえて考察し、説明することができる。
(社会的な思考・判断・表現)
- (3) 地形図から地形の特徴や高低差を読み取ったり、年表などから必要な情報を抽出したりすることができる。
(資料活用の技能)
- (4) 扇状地や三角州、台地などの地形のでき方やその特徴を説明することができる。
(社会的な事象についての知識・理解)

3. 指導にあたって

(1) 生徒観

本年度の第2学年はこれまで、教科で育てる資質・能力「問題に関連する情報を選び出し、提案された解決策と論理的に結び付け」、「それらの情報の信頼性を判定できる」力と「証拠や判断の基準となる価値に対立が生じた場合、合理的な判定ができる」力の育成に重点を置いて学習を行ってきた。例えば、地理的分野「アジア州」の単元では、自然環境や経済力、人口などの視点から自動車工場の進出先として適切な国を選択する学習を行った。また、歴史的分野「幕藩体制の始まり」の単元では、関ヶ原の戦いに際して東軍と西軍のどちらにつくかを考える学習を行った。これらの学習を通して、根拠と理由付けを示して考えを構築することで信頼性が高まることや、判断基準を明確にすることでより合理的な判定ができることに気付く姿が見られた。生徒たちは、問題の解決に際し十分な判断材料と判断基準があれば納得のいく結論を出すことができるようになってきている。

しかし、一つの結論が出てしまうとそれで納得してしまい、他の考えがないかを粘り強く探そうとする姿にまでは至っていない。例えば、歴史的分野「朱印船貿易から貿易統制へ」の単元では、貿易統制の理由がキリスト教を禁止するためで納得している生徒が多かった。そこで教師が、大航海時代の内容やアフリカ州、南アメリカ州の内容も踏まえて考えるよう指示した。すると、貿易統制の理由をヨーロッパ諸国との関係の中で捉えさせることができた。授業後の振り返りでは、より広い文脈で歴史的事象を捉えることで納得できたと感じる生徒が多く見られた。

(2) 教材観

日本は環太平洋造山帯に属しており、山地や山脈が連なり、盆地や台地などの地形が各地で見られる。また、世界に比べて標高の高いところから短い距離を急流となって流れる川が多く、扇状地や河岸段丘、三角州などの特徴的な地形も存在している。

人々の暮らしは、地形や気候を生かしたり克服したりする中で営まれてきた。人間の力が自然を克服しつつある現代においても、大規模な自然災害などを通して自然の力の大きさを感じさせられる。戦国期であれば、現代以上に自然の力の克服には大変な労力を伴っていたはずであり、ゆえにできるだけ自然を生かす工夫もなされていたと考えられる。

山形市にある山形城は、中世末期に最上義光によって大改修が行われた。山形城は、高低差のない扇状地の扇端に位置する平城に見えるため、軍事的側面から考えると守りが弱いように感じられる。しかし、伊藤清郎氏によると、戦国期の山形城は「北は馬見ヶ崎川、南ははづかし川（犬川）・坂巻川に囲まれた扇状地の扇端に築かれた台城」であり、軍事的側面の強化が施されていることを指摘している。また、高橋信敬氏によると、「出羽の山形においては、関ヶ原の戦い後の慶長 10 年（1605）前後はいわゆる『最上四十八館』の防御陣を構え、最上義光の勢力が東北の雄藩として名実共に確立した」とあり、山形盆地を支配した最上義光が戦国期から近世にかけて各地に支城を配置して守りを固めたことがわかる。これらのことから、山形城が現在の場所に位置している理由を追究することは、扇状地や盆地の特徴を捉えその土地利用について考える上で好例であり、自分たちが住む地域の過去と現在の結び付きを実感する上でも適切な教材である。

(3) 指導観 ～目指す生徒の姿に近付けるために～

本単元での授業における、資質・能力を発揮している生徒の姿を、以下のように考えている。

戦国期の城が現在の場所に位置している理由を、水利と高低差に着目し、地形の特徴を踏まえて説明している。
--

①本単元で付けさせたい資質・能力

本単元では、特に社会科で育てる資質・能力の「提案された解決策のいずれに対しても、起こりそうな帰結に至るまでのシナリオを構築」する力を身に付けさせていきたい。具体的には、山形城が現在の場所に位置している理由を、前時で得た地理的な見方を働かせて予想し、説明している姿として現れるようにしていく。

本単元では、初めに築城する上で考慮すべき側面を捉えさせるために、「あなたが戦国大名ならどの地点に城をつくれますか？」という課題を提示し、築城する上で最適な位置を予想させる。これは、東京大学大学発教育支援コンソーシアム推進機構（CoREF）の知識構成型ジグソー法を用いた協調学習授業において、埼玉県立川越初雁高等学校の渡邊大地氏が実践した授業の追試である。この活動を通して、城の立地について考察する上で、軍事的・政治的・経済的側面を考慮する必要があることに気付かせていく。続いて、城の立地と様々な地形との関わりを捉えさせるために、日本各地にある城が現在の場所に位置している理由を考察させる。その際、台地、河岸段丘、三角州といった日本において見られる特徴的な地形を取り上げる。これらの学習を通して、敵の侵入を阻む山や川があるか、堀の水は得やすいか、地形を利用した高低差があるかといった、城の立地と地形の関わりを捉えさせる。

以上の学習を踏まえ、山形城が現在の場所に位置している理由を考えさせる。特に、最上義光がどのようにして軍事的側面の弱さを克服したのか地形図や年表などの資料を根拠に、地理的な見方を働かせて考察させる。このように、獲得した地理的な見方を働かせる場面を意図的に設定することは、特に全教科共通で重視して育む資質・能力「知識や技能、経験の生かし所を見いだす力」を伸ばすことにつながると考える。

地形の関わりを踏まえて城の立地の理由を考察する本単元の学習によって、水利と高低差に着目するという地理的な見方を獲得し、今後この見方によって地理的事象を考察する姿が見られることを期待している。例えば、鹿児島県ではさつまいもの栽培が盛んであるという地理的事象を捉える際に、作物を育てるための水は得やすいかといった視点からシラス台地の特徴とさつまいもの栽培とを結び付けて捉えられるようになることを期待している。

②手立て

学習を進めるにあたり、特に以下の点に留意する。

- ・意欲的に課題追究を行わせるために、問いが生じる場面設定を工夫する。具体的には、次の二つの場面を設定する。一つ目は、ジグソー学習において軍事的・政治的・経済的側面から城の立地を考察させる場面である。重視する側面が異なれば結論が変わることに気付かせることで、様々な側面を踏まえて位置を選択する必要があることに気付かせていく。二つ目は、山形盆地であることをふせた上で盆地のどこに城をつくるかを予想させる場面である。生徒の多くは軍事的側面を重視した山城を選択するはずであるが、実際は盆地の真ん中に平城を築いている。生徒が予想した位置と実際の位置との間にずれを生じさせ、なぜ山形城が現在の場所に位置しているのかを意欲的に追究させていく。
- ・山形城が現在の場所に位置している理由を複数挙げさせるために、地形図、古地図、年表などの資料を用意して考察させる。その際、一つの理由を挙げて追究をやめてしまわないようにさせるために、資料を全て活用して理由を挙げるよう指示する。
- ・単元の終わりに、見方が変わったことや疑問に思ったことについて振り返らせ、獲得した見方を自覚させたり、さらに追究していこうとする意欲を高めさせたりしていく。

4. 単元の評価規準

社会的な事象に対する関心・意欲・態度	社会的な思考・判断・表現	資料活用の技能	社会的な事象についての知識・理解
<ul style="list-style-type: none"> ・戦国期の城の立地について意欲的に考察している。 ・地形の特徴を生かしたり克服したりして自然に適応してきた人々の営みに対する関心を高めている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・地形の特徴を踏まえて、戦国期の城が現在の場所に位置している理由を予想している。 ・戦国期の城が現在の場所に位置している理由を、軍事的・政治的・経済的側面から考察し、説明している。 	<ul style="list-style-type: none"> ・地形図から地形の特徴や高低差を読み取ったり、年表などから必要な情報を抽出したりしている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・扇状地や三角州、台地などの地形の特徴を説明している。 ・水利や高低差に着目して、城の立地の理由を説明している。

5. 学習計画（4時間計画）

★特に本単元での授業における資質・能力の発揮につながる姿とそのための手立て

学習活動（時数）	目指す生徒の姿（観点）	教師の手立て
1. 「築城シミュレーション～あなたが戦国大名ならどこに城をつくりますか～」に取り組み、城の立地について考える。 (1)	<ul style="list-style-type: none"> ・築城する上で考慮すべき側面から地形図を読み取り、どの位置に城を築くかを決定している。（関・思・技） 	<ul style="list-style-type: none"> ・築城する上で考慮すべき側面を捉えさせるために、軍事的・政治的・経済的側面から三つの資料を用意してジグソー学習を行わせる。
2. 日本の各地の城が現在の場所に位置している理由を考える。 (1.5)	<ul style="list-style-type: none"> ・台地、河岸段丘、三角州などの地形の特徴を捉え、城の立地と地形の関わりを踏まえて、城が現在の場所に位置している理由を説明している。（技・知） 	<ul style="list-style-type: none"> ・城の立地と様々な地形の特徴との関わりを捉えさせるために、台地、河岸段丘、三角州などの地形を利用して築城した城を扱う。
3. 山形城が現在の場所に位置している理由を考える。 (本時1.5 / 1.5)	<ul style="list-style-type: none"> ・既習事項を踏まえて、山形城が現在の場所に位置している理由を予想している。（関・思） ★水利と高低差に着目し、盆地や扇状地の特徴を踏まえて、最上義光が山形城の軍事的側面の弱さをどのようにして克服したのかを説明している。（関・思・技） 	<ul style="list-style-type: none"> ・意欲的に課題追究を行わせるために、どこに城をつくるか考えさせ、生徒の考える位置と実際の位置にずれを生じさせる。 ★地理的な見方を働かせるために、前時で得た水利と高低差という視点を明示し、意識的に活用させる。

6. 本時の学習活動（4／4）

（1）目 標

最上義光が山形城の軍事的側面の弱さをどのように克服したのかを、盆地や扇状地の特徴を踏まえて説明することができる。

（2）展 開

学習活動【学習形態】	目指す生徒の姿	教師の手立て
1. 前時に出された疑問を確認し、本時の学習の見通しを持つ。 【全体】	・前時の内容を振り返り、本時の活動に見通しを持っている。	・本時の学習に見通しを持たせるために、前時の振り返りと既習事項を結び付けさせる。
課題 最上義光は、山形城の軍事的側面の弱さをどのように克服したのか。		
2. 最上義光が山形城の軍事的側面の弱さをどのように克服したのか予想する。 【小グループ⇄全体】	・示された根拠と結論とを結び付ける理由付けを、諸資料から見いだしている。	・理由付けを見いだしやすくするために、机間指導で諸資料の注目すべき点をアドバイスする。
<p><重点を置いた社会科の資質・能力を発揮している姿></p> <p>★水利と高低差に着目し、盆地や扇状地の特徴を踏まえて、最上義光が山形城の軍事的側面の弱さをどのようにして克服したのかを説明している。</p> <p>（例）山形城にも水を得られる工夫があるはず。資料に「扇状地は扇端で湧き水が出る」とある。山形城は扇状地の扇端に位置し湧き水が得られて堀の水には困らないから、軍事的側面の弱さは克服できていると考えられる。</p>		<p>★地理的な見方を働かせるために、前時で得た水利と高低差という視点を明示し、意識的に活用させる。</p> <p>・生徒の考えの妥当性を示すために、研究者などの考えを紹介する。</p>
3. 本時の学習を振り返る。 【個→全体】	・山形市の地形についての理解を更新したり、新たな地理的な見方を獲得したことを自覚したりしている。	・自分の見方の変容を捉えやすくするために、指導言を「見方が変わったこと」とする。

（3）評価とその方法

学習課題について、盆地や扇状地の特徴を根拠に適切な理由付けができているかを、活動2の様子とワークシートの記述内容から評価する。

7. 授業を終えて

実践を通しての成果（○）と課題（▲）は以下の通りである。

- 地域教材を活用することで、生徒の興味・関心を引くことができた。また、山形城の位置がこれまで学習してきた城の立地条件に当てはまらない立地であることで、生徒の「なぜ」を引き出す学習課題であった。さらに、これまで学習してきた「水利」と「高低差」に着目することで、扇状地の特徴を城の立地条件や人々の営みに結び付け、課題解決に繋げることができるよい題材であった。
- 城そのものの強固さだけでなく、その周囲の地形（盆地であることや支城の配置など）にまで視点が及んでいるところがよかった。城の周辺という局地的範囲、山形盆地という広い範囲といったスケールの異なる見方ができていた。
- 前時の学習や生徒の振り返りをもとに、次の学習課題を設定しており、「探究型学習」を意識した授業展開になっていた。
- ▲指導案が生徒観から書かれてあるのは、この授業が生徒のためだということによって非常によい。しかし、だからこそ生徒観の把握が大事である。今回の授業では、次の3点が課題である。
 - 1点目は、生徒の学習状況の把握である。等高線の理解や山形城の知識など、課題解決に必要な材料を生徒がどの程度持っているのかを把握する必要がある。2点目は、思考ツールの熟達度の把握である。「根拠」と「理由付け」の違いが生徒の中で曖昧で、「理由付け」で「根拠」の内容説明をしている場面もあった。ツールミン・モデルの活用などを通して、使い分けができるような指導を繰り返し行っていく必要がある。3点目は、その授業を通して生徒の何を成長させるのかを把握することである。本時の授業では、授業中一言もしゃべらない生徒もいた。授業を通して生徒のどのような資質・能力を育成し、どのような姿に到ればよいのかを見通すことが必要である。具体的な生徒の姿で語れるようにすることで、そこに到るための手立ても明確になってくるはずである。
- ▲生徒に気付かせたい点が多く、単元構成や教師のコーディネートに課題が残った。改善点は、次の3点である。
 - 1点目は、単元構成の再考である。教師が一番追究させたい等高線の資料に十分な時間をかけることができなかった。1時間で追究できる内容を考え、資料の数や学習活動を生徒の目線にとらえ、単元として学習課題を追究できるようにする必要がある。2点目は、教師の問いかけ方や意見の引き出し方である。本時の授業では、1つ1つの資料について考える時間を区切ったため、生徒一人一人の自由な思考が途切れてしまっていた。資料読み取りと対話の時間を十分に確保し、練り上げたものを発表できるようにした方がよい。また、等高線を見るように指示したが、生徒が情報を取り出すスキルを持っていなかったため理解に到らない場面があった。教師が情報を提示してリードするなどの手立てが必要である。3点目は、まとめ方である。ホワイトボードに意見を書いて発表させたが、書かれた内容はグループで話し合われたものではなく個人の意見であった。グループ活動にする意義は「協同的」な課題解決である。生徒が対話によって理解を深め、課題解決に向かう手立てを講じる必要がある。また、ホワイトボードのよさは、みんなの話した内容を書き込んで、みんなで見合ったり、意見を追加修正しやすかったりするところにある。ツールのよさを活かした活動を仕組む必要がある。